
最弱の英雄伝

かぼちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱の英雄伝

【Nコード】

N7682Y

【作者名】

かぼちゃ

【あらすじ】

そこはふつうのせかいのはずだった
しかしある日

勇者に騎士、狼男、魔法使い、超能力者にバンパイアなど人間
の非科学的才能っていう才能が開花し始める

そんな中元々非科学的な才能を売りとしていた占い師や手品師はガ
ンガンすたれていく

何と言ってもそんなことは結構な人が出来るようになってしまった
のだ

そんな時、呪術師の家に生まれた黒独 尊がそんな奴らに嫌がらせをするためだけに才能を開花させたものが集い才能を磨く大学に入学する

プロローグ

いきなりだが少し昔話をしようか。

ここ数十年のことなんだが宇宙人が飛来してきた。

いや待って閉じないで、私だって解っている意味わかんないって、
だけど降ってきたんならしょうがない。

しかし宇宙人の飛来は地球人の本来の力を開花させた。

魔法使いに超能力者、忍者に騎士に狼男にバンパイアになる人間が
続々と現れた。

宇宙人も度肝を抜かれただろう。

私だってそうだ。

家がそういう家系なのは知っていた。

しかし私が騎士になるとは。

生存本能がトリガーだったのかもしれない。

宇宙人に襲われた時、わたしの剣が地面から生えてきて、
気付けば宇宙人を一人残らず撃退していた。

他のところもだいたいそんな感じだったらしく、

地球は危機から免れた。

今では約8割の人間が能力者だ。

これによって人類は持つ力がそのまま序列になった。

一般階級である私はこの騎士の絶対的な力によって

王族に準ずる身分となった。

王族なんてものがあつたのかと驚いたが、それもそのはず、
新しく作られた身分制度だ。

逆に、何も変化がない人間は、差別の対象になった。

「お嬢様、そろそろ学園に向かう時間でございます」

「うむ、遅れてはいけないな、さっそく登校しよう」

「ちっ成金が」

「今舌打ちしなかった？」

「いいえ」

わ、私偉いんだけどなー

ちなみに彼女は国から支給されたメイドさんだ。

私の世話をしてくれるのはいいんだが、もう少し笑ったりしてもいいんじゃないか？

たしか彼女もなんかすごい能力者だと聞いている。

なんだか忘れてしまったが確か紹介の時の資料に書いてあったはずだ。

それに、お母さんがべた褒めしていた。

「私、お嬢様と比べると非常に劣る能力ですがケルベロス憑き、獣化でございます。」

この人思考読みの能力じゃないのだろうか。
なんか怖いんですけど。

そしてなるほど、うちのお母さんは犬が大好きだった。
だから雇ったのかもしれない。

彼女に犬耳が生えているところを想像した。

これはやばい、顔がにやけてしまっとなおらない。

なぜか、メイドさんがすごい形相でこちらをにらんでくる。

やっぱり思考を読み取れるのではないのだろうか。

お手って言うてみようかと思ったけれどやめた。

第一章、不幸な女の子

ここは才能のあるものが集う大学

その始業式である。

私、鈴木 サチはこの超有名校に受かったのだ。

試験は超がつく難易度である。

まあ去年の話だが。

試験とは基本学科試験である。

合格点は600点ほかの学校とは違いこれを超えれば必ず入学できる。

しかし学科試験の満点は600点。

大学の試験で満点などとれる人間はまずいないだろう。

とれたとしたらその人は能力者だ。

実はこの試験の前に能力の点数を決められる。

その点数が学科試験の点数に追加されるのだ。

例えば私の能力は見えないものを見る力、点数は260点

ちなみに学科試験は397点だ。

自慢じゃないが平均点180点のテストである。

見えないものって何かって？

なんか人が能力を使うときの波？みたいなもんが見えるだけである。

それだけで260点、まったくいい世の中だ。

ちなみに炎を口から出す超能力者の人は820点、魔法使いは1200点。

主席の人は確か「聖なる騎士」という能力で、

8万と6千点だったはずだ。

私の努力はなんなのだという話である。

今その人のが主席の挨拶をしている。

何という波だろうかこんなに濃い色は見たことがない。

つかまぶしいな真っ白な光に包まれているように見えるよ。

だけど私の興味はそこじゃない。

能力持つてる人って怖いし。

あまり能力を持っていなそうな、

つまり波が見えない人を探していたのだが、運のいいことにちょうど前に座っている人が波がほとんど見えないのだ。

いやかすかに黒い渦がどよめいているみたいだけどかなり薄い。

これはいける。

ちよつと男の子つてところがハードル高いけど、勇気を出して声をかけてみよう。

この時は知らなかった。

この人が下手な能力者よりも全然厄介な人だってことを。

呪術師

> 章Ⅱ 呪術師 <

俺の家は呪うことを仕事にしている。

藁人形とか作ってるわけだ。

特別な力なんてない。

ここにいるような奴みたいにな、魔法も超能力も使えない。

まあ確かに、俺は人とは違うかもしれない。

だが、努力と時間の浪費によって

恨めしいあいつを転ばせるくらい出来るようになった程度だ。

それにこんなことは誰にでもできる筈だ。

努力さえすれば。

だけど俺は許せなかった。

呪いなんて信じなかった人間が魔法や超能力を、いきなり出来るようになったこと。

当然のようにそんな奴をあがめたて始めたこと。

前からいた俺たちみたいな奴の力は相変わらず信じようとしなかったのに。

この悔しさがわかるか？

解らないだろう。これに賛同してくれたやつは一人しかいなかった。たった一人の親友だ。

俺と同じ職業の奴らさえ賛同はしなかった。

いま俺は能力を開花させた奴らが集まる大学に編入した。

ここで俺の力を見せつけてやる。

基本、あいつらを見下せればそれでいい。
たとえ何も見せつけるものがなくなっても。

「どうやってここに俺が編入できたかって？
手品を見せてこれが俺の能力ですって言ったなら、
180点ももらえた。」

「なんてちよろいんだろう。
それなりに緊張して、手汗がやばかったが能力者なんてこんなものだ。」

「誰もがよく分からない。
それは畏怖の対象になるはずなのに。」

「あとは試験勉強だ。
勉強なんか全然簡単だった。」

「あのーすいません
わ、わたしえっと、こんにちわ？」

「誰だろうか、俺は能力持った奴と仲良くなんならなと決めて
いるんだが。
どうやって切り抜けよう。」

「あれ、聞こえませんでした？お、おい」
「無視だ無視。」

「私そんな強くないっていうか
たいした能力持ってなくて仲良くなれる人捜してて、」

いや、お前にはきつと鉄のハートとかいう能力がありそうなんだが、

なんでこいつ一人で話し続けられるんだ。

だが能力を持ってないのか、、

「こんにちは」

返事を返してやる、俺の性格はそこまでねじ曲がってないからだ。

「わ、喋った。あ、こんにちは」

「・・・」

「・・・」

これは俺が返さなくてはならないのだろうか。
そもそもこいつは誰だ？

そんな時スピーカーから放送が入った、
どうやら成績優秀者のあいさつが終わったらしい。
本当に助かった。

「毎年のことですが、入学者が定員を割ったので今から最後の試験を始めます。」

「ただ今から、レクリエーションとして配布した学生証を奪い合
っていたきます。」

今から6時間後に2つ以上の学生証を持っていた方を合格とするの
で、がんばってください。」

なんだそれは。お前らが適当な入学試験をするからそんな事態に
なるんだろう。

それとも俺みたいに入った奴を淘汰するための試験なのか。
これはかなり非常事態なんじゃないだろうか。

これはやばいな。

俺は何もできないじゃないか。

呪いってのは数日前から準備してやっと、
相手を転ばせる位の力なんだ。

呪いのわら人形はお守りとして持ってきたが相手の名前がないと
使えないし、
もし使えたとしてもかすり傷を負わせる程度のものだ。

まだ目的は何も達していないのにこんなところで。

リタイアなんて御免だ。

「に、逃げましょう。」

ここにいたら死んじやいますよ。」

さっきの奴が俺のを握って、ひっぱりあげようとする。
さすがに死ぬことはないだろうと思っていると、

なんだあれは。

竜が炎を吐いている。

召喚術ってやつだろうか。

話には聞いている。

それでも俺は才能ってやつの情報収集はしたのだ。

「ここにいたら丸焼きですよー!!」

俺は能力者つてのをなめてたかもしれない。

もうズボンが焼けた。

これ高かったのに。

こいつが手を引つ張り上げなかったら体じゅう大やけどをしていた所だ。

俺は、見知らぬ女子に連れられ、体育館の外に出た。

そいえば気になることがあった。

「なあ、なんで俺のことを助けようとするんだ？」

自分で言っというてなんだが、俺は屈折した性格かもしれない。

「知りませんよ、私に教えてください。」

とにかく、予定は狂ったが俺は外に飛び出した。

敗北

<敗北>

体育館を出た。とりあえず何処かに向かわ無ければいけないだろう。

あの竜から逃げないといけないし、こんなに人の多いところで、立ち往生していたら、流れ弾みたいなのに当たってしまう。

俺が選べる道は3つ。

校庭か校舎か、またこの学校の周りを囲むように生えている林の中か。

学校の敷地外はさすがにまずいだろうと思うからだ。

そもそも2つ以上の学生証の所持となると学生から学生証を奪い取る必要がある。

そう考えても、敷地外はない。

諦めるつもりだけはないからだ。

「あの、私考えたんですけど。」

学園章を奪うにはここにいる人ならざる奴らを倒すしかない。

俺に可能なのか？

成功するビジョンが全く浮かんでこない。

「やっぱり単純な力じゃあなたも私もかなり、不利だと思うんです。」

どうすればいい。

切れるカードがない。

せめて準備する時間と材料があれば、
いやそれでも、人ひとりをぼこぼこにするのはかなり難しい。

「泣きたい・・・。」

正直、初対面なのに馴れ馴れしいなと思い、
少し無視していたが、泣かれても困る。

そろそろ、移動する場所を決めるか。

俺が学生証を奪うには、何か道具がいる。

ボールのようなものがあれば何とかなるかもしれない。
いくら何でも人なんだから、後ろからやれば何とかなりそうだ。

「よし、とりあえず校内に行くぞ」

サキは泣きそうな顔をしていたのだが、ぱあっと花が咲くように
笑顔になる。

忙しい奴だな。そして、これが女の武器って奴か。

「あ、私もそう思っていました。

校舎内なら、相手も自分もあり派手な攻撃は出来なすし。
私たちはもともとそんなことできませんね。

まさにノーリスク・ハイ・リターン。

そうと決まれば急ぎましょう。ここにいと危ないですよ？」

いきなり饒舌だな。

そういえば俺が炎や雷を出せるとは思わないのだろうか。

「そもそもなんでそう思うんだ？」

「はい！なんでしょう。何のことですか。」

「だからなんで俺に派手な攻撃が出来ないと思うんだ？」

すこし不意を突かれたような顔をするが、
すぐにふっふと不敵に笑い始める。

少し気持ち悪い。

「私は超能力者なんですよ。」

おい、能力ないって言っていたじゃないか、
嘘ついてたのかよ。

「私見えるんです。」

その、力！みたいなのが？

「なんだそれ。」

力！とか言われてもな・・・。

「えっと魔法使いに会ったことあります？」

無いが、今言うのはなんか癪だ。

「私はまず魔力が見えるんです。」

こう一人でファミレスいたりすると、

あ、あの人魔法使いだってわかるんです。」

なんか誇らしげだがお前一人でファミレスいくのかよ。

俺も行ったことがあるが、一人だとなんか、他の人の席を奪っているようで嫌だ。

そもそもなぜ個人席がないんだ、ああいった店には！

「おい、そこのお前たち！

おいらの名前は駄足駿だ！！」

誰だ？ このもっさりした坊主頭は。

なんか野球部に入ってますって感じた。高校のときは甲子園で活躍したことだろう。

すべては妄想だが、本当にそんな見た目なのだ。

「な、なんですかいきなり、私は鈴木サチです！」

あ、そこ自己紹介するのか。

なるほど、第一印象ってのは大切らしいからな。

「お前たち学生証は持っているか。持っていないなら別にいいんだが、

持っているなら置いていけ、そうすれば痛い目見ずに済む。」

持っているが、わざわざそれを言う馬鹿はいないだろう。

「持ってますけど、おいていきません！」

馬鹿なのか、バカなんだな。

「おい駄足、先ず話あおうじゃ」

「問答無用！！」

話を聞く気はないらしい。

駄足は右足を大きく踏み出した。

そして膝に両手に乗せる。

あいつからここまでの距離は約5メートル。

さすがに何か来ても避けられるだろう。

魔法つてのは呪文を唱えないといけないんだろ？

「き、来ますよ！」

サチが叫ぶ。

なんだと聞く暇などなかった。

すでに駄足にタックルされていたからだ。

驚くことに、一歩で5メートルもの距離を一瞬で飛んできた。

肺の中の空気をすべて吐き出させられる。

俺は舐めてたのかもしれない。

なんだこれは、

俺は自分のことが特別だと奢っていたのかもしれない。

俺の家のことを馬鹿にして、恐れて、化け物だの人にいるいろ言われてきたが、

あとで、そういうやつに教えてやろう。

こういうやつが化け物というんだ。

それのはずなのに、なんでこいつらは英雄で俺たちが化け物なんだ。

「おいらの力は黄金いっしゅんのまたたきの右足

右足が無敵になる超能力だ。」

その言葉を聞きながら俺は意識を失った。

とりあえずなんなんだそのネーミングセンスは、まるでサッカー少年のようじゃないか。

おいらのこの黄金の右足という能力には弱点がある。

強すぎる力はリスクをはらむものだ。

右足が最強になる代わりにこの能力は、使うと30分は動かなくなる。

相手は、林の中まで吹っ飛んで行ってしまったので、学園章の回収は不可能だろう。

「タツクルした右肩がすごく痛い。」

駆足は誰にも聞こえないような声で一人呟いた。

なぜなら、右足以外は強化されないからだ。

勝算はマイナス

>勝算<

後頭部を木にぶつけて気絶していたらしく、ズキズキする。まわりも木だらけなので林の中まで飛ばされたのか、と予測する。少しどの程度気絶していたのかと、心配になるが、日の落ちていないことを見ると、まだ時間はまだあるようだ。

「いてえな、覚えてろよ」

ひとり呟く

相手の姿はもうないので学生証は奪われたのだろうカバンの中に入っていたので鞆も取られたかもしれない

「あ、気が付いたんですか
死んだらどうしようかと思ってたんですよー」

笑顔で怖いことを言うやつだな

「大丈夫だ、あ、カバン拾ってくれたのか」

どうやら鞆までは取らなかったらしい
さすがに犯罪になるかと思ったのだろうか
確認するとやはり学生証は入ってなかった
しかし藁人形とくぎと札があるのは良かった
これは作るのに時間がかかるからな

「あの、これからどうするんですか」

心配そうな顔をいて聞いてくる

そういえばこいつはなんでついてくるのだろうか
俺に利用価値などほばないはずだ

ん？ そもそもこの鞆チェーンでベルトとくっついていたんだが
なんで落っこちたんだ？

俺の推測が正しければこういうやつは好きだ
正直、親切とか正義とかは大嫌いだからな
まあそれも推測だ。

好きな奴に勝手な妄想をするストーカーみたいな。

「どうしたんですか？」

「いやすこし考え事をしていただけだ。
それよりあの始業式であいさつしていた奴の名前ってなんだか解るか？」

「えっと、千代 緋色さんだったはずです。」

「よし、そいつはどこにいるかわかるか。」

待つてください、といって林の中を出ていく。

「分かりましたよ、あっちのほうですね。」

いや、いくらなんでも分かるの速いな！

だが、どうやら驚きが顔に出ていたらしく、強い人は、力みたいなのがわかりやすく出ていて遠くからでも見えてしまうらしいとなぜか言い訳をするように説明してくれた

「そこに行くぞ。」

「ええ！ その人試験で最強って言われた人じゃないですかその人のところ行くと、行っても勝てませんよ！」

「俺がこの試験に受かるためにはそいつしかない。」

そして一番嫌いなタイプでもある。

ケータイを取り出してそいつの記事を表示する

見出しは天才、千代緋色の秘密に迫るだ。

さすが、宇宙人に囲まれたにもかかわらずそれらをすべて倒してしまつような才能を持っている英雄は違うぜ。

勝つと考えるとこいつしかない。

他に血液型も生年月日も好きなものも嫌いなものも分かるやつがいるとは思えないからだ。

って嫌いなものはきゆうりか、意外だな。

だが都合のいい情報だけではなかった。

本来喜ぶべきなのかもしれないが、

その記事には彼女の能力も記されていたのだ。

そう、核兵器でもびくともしない鎧と、

ダイヤモンドを豆腐のように切り刻む剣を出現させる

能力のことが。

メイド怖い

俺は鈴木サチの案内で、林の中を進んでいた。

それにしてもこの能力は便利である。何しろ能力者であれば、近づいてくれば

相手より先に気付くことが出来る。これによって林の中を進んでいく俺たちは一切の敵に会わず進んでこられている。

確かに、ほかの使い道は？ と聞かれるとかなり困るが、ダンジョン系RPGならパーティに一人はほしいキャラクターだろう。

それに、話によると、能力が才能として開花しても気づかなかったり、間違った解釈をする人も少なくないらしい。

俺にはない可能性だがこいつには少なからず残されていることだろう。

「む、前方に力の反応です。ここは迂回しましょう」

実に便利だ。そういえば能力の名前は勝手に決める奴が多いらしい。

魔法だと早い者勝ちなのだろうが、超能力とか、それ以外の特殊なものなら、

自分だけの名前を勝手につけるのだ。

俺はこいつの能力をこっそり心の中で、能力者発見器となずけた。そういえば、俺をのしたあのもっさり坊主頭は、自分の能力を黄

金の右とか言っていた。
あれは超能力だ。

超能力は、予備動作のあまり必要のない力の全般だ。
これは魔法と比べると力は弱く、精神力が力の源となる。
基本としてスプーンを曲げるくらいならだれでもできるらしい。

ちなみに、魔法はこれも精神力が力の源となるが、
それによって作った文字をもとに、そこに自分の言葉を乗せて発動する

またそれも大きく二つに分けられ、純粋な力だけを発現する人と、
物や獣を召喚する人がいるのだ。

だがこの二つに当てはまらない奴もいる。
それは、精神力に影響されない力を持つ人だ。
例えばこいつはそれなんじゃないだろうか、見るからに、気合を入
れると良く見えるって類では
ないだろう。

その時、先行していた鈴木が手招きしてきた。
「見えましたよ。」

なるほど、あれが緋色か、長い髪に銀の鎧をまとっているので分
かりやすい。

「よし、とりあえず様子を見るぞ。」

「いえっさー」

なかなか乗りのいい奴だな。

しかし問題はこれからどうするかだ。

「そこにいるのは誰だ！」

なるほど、もう見つかったらしい。

準備も何もしていないんだがな。

「挑戦者か、ふっふっふ、やっと私の力を見せる時が来たようだ。さつきからメイドにばかり倒されて私戦ってないから、この時を待ってたのさ！」

迷子になったのは良い誤算だったな笑う緋色。

なんか思ったのと違うが、こいつが緋色に間違いない。だが、あのもつさりのように、いきなり襲いかかって来ないだけかなりいい相手だ。

「私の名前は、千代緋色いざ勝負だ！」

前言撤回だ。

緋色がとうつと手を大きく振ると剣が現れた。それがダイヤをバッサバッサと切れる剣か、

「とうつ」

投げた！！

「あぶねっ」

とつさに避けたが、後ろにある気がバッサバッサと切られていく。これはやばい。

「ってかあったらどうすんだ！ 馬鹿か！！ 死ぬ！！」

噛んだ。しかしそんなことにかまってられない。

正直この相手に俺が勝つにはまだ一つ足りないものがある。

今は時間を稼ぐしかない。

「避けたらいいんじゃないか。ていつ」

また新たに2本の剣をあれは召喚だろうか手品のようにぽつと出して、

投げつけてくる。木の陰に隠れようにもまったく何もなかったように切って進んでくる、

剣にどう対応すればいいのだろうか。

それに相手も投げ方が素人だが俺も素人だ。

これは当たる。そして死ぬ。

ああ、左の腕が熱い。かすっただけでも切れ味が切れ味なのかかなり痛い。

「いつてえな」

だがうずくまっている暇はない。

えい、とかほいつ、とか言っつて剣を投げってくる殺人鬼がいるのだ。

呪いつてのは、基本何もできない。

だがリスクを払えば使い道はある。

それにやっつと恨みを晴らす時が来た。

悪あがきだろうがなんだろうがやってやる。

鞘から素早く札を取り出しそこら辺の木に張り付ける。

そして手ごろな茂みに身を隠す。

「む、なんだそれは、私の名前が書いてあるな」

これは、気になる札という我が家伝統の中でも俺が、「呼びこの

呪い」から派生させたオリジナル

これに名前を書かれるときになってしょうがないという代物だ。

「えいつ」

緋色は掛け声とともに木ごと真つ二つに切ってしまう。

あれ作るのにかなり時間かかるのにな…

だが打ちひしがれている時間はない。

どうやらあれは効果が薄いようだ。

人により個人差があるのでしょうがないだろう。

挫けるな俺、一枚2900円作るのにかかっているが、挫けるな。

今度は木の札と五寸釘それに俺の血を垂らす。

これでインスタントノックされるドアだ。

ノックされるドアとは相手を不眠症にする呪いだが、
インスタントにすることでただの音がする板となる。

しかし物は使いようだ。茂みに隠れながら思いつきそれを投げる。

聞こえなかったらそこで終わりだが、あれは作るのに1時間と30分

そして俺の血が必要だからぜひ役立ってほしい。

「コン、コン、コン」

「あっちか、えい、とうっ」

どうやらうまくいったらしくあらぬ方向に剣を投げつけている。

どうだこれが呪いの力だ。みんなもやってみるといい。
準備にかなり時間がかかるが。

誰だ、今他のもので代用すればいいと言った奴は！

そうじゃないだろ！ 泣くぞ！

「見つけましたよ。すごく大変でしたー」

サチが戻ってきたこいつには緋色の髪の毛を探してもらっていたのだ。

見つかるかどうかは賭けだったが、こいつの能力で何とかなかったらしい。

実はこいつすごい奴なんじゃないだろうか。

感謝は後ですとして、これで完璧だ。

呪いってのは準備さえ完璧であればかなりの力を発揮する。

藁人形 特別性の釘 相手の髪の毛 名前 星座 そして

人体のツボの知識さえあれば誰にでもできる。

まあ、この人形を作るのは骨が折れるが。

素早くわら人形にそれらを書き込み、髪の毛を括り付ける。

これで呪いのわら人形の完成だ。

しかし、実際は君たちの思っているような効果は呪いのわら人形にはない。

これは、藁の編み方や材料が比較的簡単なもので、
藁人形にくぎを刺すとそこに対応した体の部位が、注射に刺される

くらい

一瞬いたってなるの程度しかない。

これだけ準備してこの効果かよ、と言いたくなるがこれが俺の全力だ。

だがこの角度で、ここにくぎを突き刺せば…

「えっなにこれ、えっ、あっ」

緋色の戸惑うような声が聞こえる

成功した！

「よし、いまだ！ あいつの鞆から学生証を奪うぞ」

藁人形をせっせと作って釘を打ちつける俺を、
微妙な目で見ていたサキには何が起きたかわからなかったらしく、

「えっなにがおきたの？」

オロオロとしているが関係ない。緋色の鞆から学生証を奪う。
かなり入っているな。

ちなみに俺が今やったのは、足がしびれるツボを刺してやったのだ。

ダメージとしてはほとんどゼロだが、この使い方なら、1時間は足がしびれ続けるはずだ。

呪いの勝利だ。

「き、気合だあ」

起き上がった！

まあ足がしびれる程度なので、がんばれば普通に動けるのだ。

「学生証はすでに奪った、ぜ、全力で逃げる」
「いえっさー!!!」

もう30分は時間が経っただろうか、実はもう三日とかたっているんじゃないか。

だがはぐれたメイドが戻ってきてくれた。
最初は、謝っていてくれていたんだがなぜかどんなことがあったを説明していくことにドンドン
態度が剣呑になって行ってしまった。

「それでお嬢様は迷子になったあげく、そこで足を抱えて何をやっていらっしゃるのですか？」

メイドが怖いよ

「えつとなんか、足つつちゃったみたいでなんかめちゃくちゃ痺れてて・・・」

「それであなは、学生証8枚はあつたはずなのにすべて奪われたと」

なんか言葉遣いが少し乱暴になっていないかと思つたが、指摘したら火に油を注ぐようなものだろう。

「いや、なんか事故っていうかその…ごめん」

平謝りするしかない私、だって怖いもん

「まあここに来る間に12枚は奪って来たので大丈夫ですけど、」

さっすがケルベロスさんです。

っていうか私ってやっぱり足手まといだったのかな

「終了までここで隠れましょうか、教育係として説教する必要もありますし」

あと二時間あるんですけどー

勝利？ の代償

「あのー、腕って大丈夫なんですか？」

ふと、俺の腕についてサチが質問をしてきた。

まあ当然だろう制服が真っ赤になっている。

だが切り口がきれいすぎて逆に治りが早く心配はない。 たぶん。

「問題ない、慣れているからな。」

これは強がりなどではなく、本当に慣れているのだ。
ある理由で俺は痛みには強い。

「本当に大丈夫ですか？ 血はもう出てないみたいですけどそれ、絶対痛いですね？」

確かに痛いがこの程度の痛みより、伝えなくてはいけないことがある。

そして、このぐらいでへこたれていたらやばい。

「さて、人を呪わば穴二つという言葉を知ってるか。」

「あ、人を呪うと帰ってくるってやつですね。」

なかなか分かってるじゃないか、一般人には知られていない言葉だと思っていたが。

「そうだ。そしてさっき俺は緋色を呪い、それをお前は手伝った。」
呪いってなんですか？ と聞いてくるがそんなことは関係ない。
時間がないのだ。もうすぐ始まってしまう。
というより俺はもう始まっている。

「あのー、もしかしてさっきの緋色さんみたいになるんですか？」

惜しいな、発想は悪くない。

「少し違う。正直あんなもの比べ物にならない。」

そう、俺が痛みに慣れている理由はこれなのだから。

「お、驚かさないで下さいよ。」

足を抑えるサキ。

そんなに怯えなくともいい。あいつは大げさに反応していたが、実際やべ、足痺れた、ぐらいなのだから。

「いやまあ、今回はそんなにひどくないだろうが」

「な、なんですか！」

「運が悪くなる。」

「へ？」

いやいや、これは結構やばいと思うんだが。

「いや、運が悪くなるんだ。」

「え、別にそんなこと」

全然どうってことないじゃないですかー、と言おうとしたサチの顔がどんどん青ざめていく。

「「ガルルル」」

なるほど、きつとおれの後ろにはきつと魔獣かなんかがいるんだろつ。

聞いたことのない鳴き声ができるわけだし、大きな影が来ている。

俺たちは全力疾走した。

サチも意外と足が速いんだな。

ちよっと置いてかれ気味だ。運動不足がたたったか。

ここには、あらゆる超能力者、魔法使いがいる。

運悪く何が起るのかさすがにわからない。

ちなみに、不幸つてのがどのくらいのもんかというところ、リアルに隕石おっこつてくるぞ。

まあ行った呪いによって、程度も違うのだが、生き残れるのかだけが心配である。

ちなみに今、どこからともなく炎の玉みたいなのが、頭にクリーンヒットしたが、

そして、肩が痛すぎて気付かなかったただで足からも頬からも血が出ている。

絶対に俺は挫けない。

逃げるときに、後ろを振り向いてはならない

逃げるときには後ろを振り向いてはならない。

そんな言葉をどこかで聞いたのを、思い出していた。

「あと、28秒だ！」

「何がですかー？」

「不幸な時間だ！！」

だからがんばってはしれ！」

そう俺は度重なるこの呪いの、

副作用を受け続けることでどの程度のことをすれば、
何秒、不幸時間が来るかを把握していた。

「わ、分かりましたー」

だがそんなことを把握していても、

魔獣の勢いは止まらない。

林の中をつつきて逃げていたので、

木をなぎ倒しながら進む魔獣と5分5分といった所だが、

どうやら林ももう終わりで校庭に出るらしい。

どうせこれも偶然ではなく運悪くってやつだ。

あと12秒

俺たちは校庭に出た。

複数人、人がいるが運よく助けてもらえるなんてことは起こらない。
これだけは、言える。

「きやあ」

サチが転んだ。

俺は自分のいのちを投げだしてまで、他人を助けるようなできた人間じゃない。

しかし、俺は、そいつの未来も、家族も、希望も、時間も、友情も、また、

そのすべても、奪う覚悟も消す覚悟も、出来ちやいない。

俺はその時、初めて魔獣を見た。
全体的に青い犬って感じた。

牙が大きく背中も青い焰に包まれている。

なかなかかつこいいじゃないか。

名前も知らないし、初めて見たが。

さすがにこれやったら、死ぬんじゃないか？

こんな大それたことはじめてやるぜ。

「な、なんで。」

右半身を腕からガッツリかじられた。

血が半端ないな、噴水のように出ている。

だが、泣き叫ぶことはしない。

痛いのは慣れてるしな。

「なんで助けるの。あつたばかりなのに、私、あなたの学園章持つてるんですよ！それに実はあなたより年上です！！」

言ってることが支離滅裂だし。

人を助けるのに理由なんていらないと、かつこよくいたいのが、俺に罪を着せ、暗闇の中に8年閉じ込めたあいつへのただの当て付けだ。

っていうかやっぱりおれの学園章奪ったのお前かよ！

最初、少し助けられたと思ったからこいつが持ってたんだろうなぐらいで取り返すのは、ちょっと遠慮してたのに！！

まあどっちにしろ俺はあいつから奪うつもりはなかったから、行動は変わらなかっただろうが。

「不幸時間はもうとくに終わってるでしょ！
なんでなんですか！」

いや、普通の運に戻っただけで幸運になるってわけじゃないしな。

「もう、時間は終わってるのに何で、暴走をやめないの！！」

なんでなんで五月蠅い奴だな。それに、

「お前の不幸時間は終わったが俺のは終わってない。

お前が手伝ってない呪いもあるからな。あと、18秒はあるな。それに魔獣ってのは、獲物をしとめないと、消えないんだろ？」

まあ、実際雑誌で読んだ情報だから本当のところは知らないんだが。

その時、「おれ」の右腕は引きちぎられた。

死ぬ時つてのはあまり怖くないって話を聞いていたんだが、これは怖いな。完全な無つてのは想像しただけで、怖い。

それとも、まだ死ぬほどの傷じゃないから怖いんだろうか。

そしてさすがに痛い。血も流しすぎたみたいだ。

「私はまだあなたの名前も聞いていないのに。」

どうやら私はもう不幸ではないらしい。

「肅清の時聖なるものも紺な、」

そのあとの言葉はもう俺には届かなかった。
血がないからってよりも痛すぎて気が遠くなる
慣れててもこれは、無理だ。

黒独尊は、まぶたを閉じた。

[illegible]

「む、やってしまったか。これはやばいな。」

死ぬなよ！ 少年！」

嘘

なんか夕飯のおかずがハンバーグだと思ったらカレーだった時ってカレーが嫌じゃないんだけどなんかいやな時ないか？

同様に完全に死んだと思ったら死んでなかった時、そんな気分だ。

まったくそんな気分だ。

「あらためて、自己紹介をします。」
なんだこいつ

「私の名前は鈴木サチです。
助けてくれてありがとう。」
紹介してくれ、誰なんだ？

「まあ先生が助けたのはお前じゃない
そこにいる新入生なんだけどな。」

「それに先生の炎獅子を消し炭にするとはやるな。」

「えっ先生だったんですか。
だってその杖、生徒に配布されるものですよね。」

「ああ、これはばくつた。
それより、先生はそんなに影薄いのかよ。」
「いやお前の影は濃い。」

どこの学校に学生服の上にマントを羽織っている奴がいるんだ。

「それに、あんたのこと知ってるぜ。

2年の目だろ。」

体が動かない。

「つかこれ、あれじゃないか霊体みたいな感じ？

幽体離脱していてーみたいな。

「お前はこんなことが起きないようにいるんじゃないのか。」

「すみません。完全に油断していました。」

「油断ぐらいであの程度の魔獣に後れを取るわけないだろう。」
「どうということだろうか？」

「それが、何度もやろうとしたんですが、杖が折れてしまって、
それに魔石もなぜか砕け散りまして…。」
「なんの話をしているんだ。」

「確かに折れている。何をしたんだ？」

「それが何もしていませんが…」

「さすがにそれはないだろう。杖が何もしていないのに折れるはずがない。」

「それにどうやって杖なしで炎獅子を燃やしたんだ？」

「あの、なんか不幸時間つてのがあって、
それが終わったときに壊れてない魔石があったのを見つけて。」

「もういい、別にこいつが嫌いでもわざと見殺しにした、
という訳ではないだろう。目が赤いしな。」

とりあえず、あとで職員室にこい。」

「分かりました。」

おいなんか、おいてかかれている感が否めないが、
右手が生えている。

俺の体に何をした！

いや嬉しいが怖いんだ。

「ところでこいつは、どうなんだ？」

「学園章は10枚所持です。私を含めてです。」

「そうじゃない、お前の目ではこいつの力はほとんどないんだろ。」

しかしこいつは、帽子から鳩をだし、私たちが選んだカードを三回
も当てて見せた。まるで手品のような能力だ。」

まあ、手品だしな。

「しかしその枚数所持はなんなんだ？」

「いったい、こいつの能力はなんなんだ？」

そんなことより俺のちぎれた腕を治したのはお前か、
お前の能力はなんだ。

マジで半端ねえな

俺こんなところ来なきゃよかった。

くっそ、なんか突っ込みどころが満載な気がする。

何より、俺の腕がどうなっただけでどうなったか気がするがここはどこだ。

さつきから背中冷たい。

「私にもわかりません。髪の毛を拾ってこいと無茶ぶりをされましてが、

それを何に使ったかは全く。」

「斉藤先生、何してるんですか？ 廊下に生徒をほおっておいて。白衣を羽織っているの、保険の先生だろうか？
よつと俺を片手で担ぐ。」

いやいてえよ！！

完全、今背骨軋んだ音がした！

ってかここ廊下か。

道理で背中が冷たいはずだ。

「まったく困ったものね、生徒をあんなところにはおっておいて」

もう喋れそうだが声が裏返ったりすると恥ずかしいから
もう少し黙っておこう

「それに斉藤先生の召喚した炎獅子に噛まれたんでしょ」

マジで！あいつのせいだよ。

「でも斉藤先生がその腕、治してくれたのよ。

彼の能力は超再生でね。彼に触れるもので生きているものなら、
自分の体が、頭だけになっても一瞬で再生できるの。
だけど痛みはすべたあの人にかえるわ。」

「それに結構心配だったみたいで、あの人の親指

噛みすぎてギザギザになっていたわよ。」

まあ絶対許さないが
助けてくれたのには感謝しなくてはならないだろう。

「はい、保険室についたわよ。」

固いベットに投げられる。

「痛い。」

「あら、喋れるようになったの？」

「まあな、お陰様で」

「でもせっかくここまで来たなら、
いろいろ試していかない？　ここ以外ではないような薬がたくさん
あるわよ」

、
差し出された薬箱には、確かに変な薬草や液体の入った瓶がある。

それには確かに興味がある。
だが好奇心は猫をも殺す。いったいどのくらいの猫が、好奇心で死
んでいるのかは
知らないが。

「飲まないが、効果は教えてくれ。」

む、予防線を張ってきたね。と笑って

よし三つまで質問に答えてあげようといった。

これは薬以外のことも聞いていいのだと判断した。

「俺は受かったのか？」

その質問が来るとわかっていたかのように、迷うことなく。

「さあ、まだ決まってるわい。

そしてそれはここで決まる。」

「時間切れといえども、あなたは学生証をたくさん持っていたし、安全と不正防止のため、受験生に紛れた生徒を、助けたそうじゃない。」

俺のために新たに試験とは、大変嬉しいが、
今回は鳩を持ってないし他にもできるマジックなんてない。

受け答え次第で落ちるわけか、ここは嘘をつき倒すしかないだろう。

「さあ質問は後二つ、その二つであなたの合否が決まるわ。」

なんか意味深だ！！

難易度高そうなんだが！！

くっ、これなんだ、自由度が高すぎてなんのこっちゃ解らない。

「3」

「2」

なんかカウントダウン始まった!!

ここは素直に質問するか

「何を問えば俺が受かれるのか？」

「私がわからないことなら何でも
そしてあなたが知っていること。」

そういつてパソコンを用意し始める。
こいつ、インターネットで検索する気だ。

「3」

カウントダウン短くね。

「2」

「1」

よし、ここはなんか藁人形の特殊な編み方
3種類とかでいこう。これならインターネットには乗ってないはず
だ。

「ちなみに、これはサービスなんだけど
私の能力教えるね」

「私の能力は相手に問われたことを相手が知っていれば

こたえられる能力よ。」

おわった——

ただのムリゲーだった——

「さあ最後の問いは？」

いやこれも試験なんだから何かあるはずだ。

俺が知っていることで、それはつまり相手も知ることになるのだが
あいつが知らないこと。

いや、なくね？

「ほれ、はやく。」

時間もないしもうこれでいいか。

「もし、運悪く8年間父親の罪をかぶって、牢屋みたいなところに
入れられたとして、はたして出てきたとき、父親はなんて
俺に言葉をかけ俺はなんて答えたか。」

「つらい過去がありそうだけれど
まさか、そんなお涙ちょうだいで
受かれると思っているの？」

「わかるのか？」

「ん？」

「本当にお前に分かるのか？」

「いいわ、なら答えてあげる。」

もう忘れたかったんだがまあいいか。

ここらで復習しても。」

「あなたのお父さんは、私はいつたい誰を殺したのかと問いあなたは、人形って殺せるのかとこたえた？」

「答えてないじゃない。」

それに、質問を質問で返すのはマナー違反だと思うわ。」

「意味が解らない。残念ながら、不合格よ。」

やっぱダメか。理解できないで合格かと思っただが。

「なあ正解はなんだっただ？」

「あなたが答えを知らないものには答えられない能力なんだけど。」

じゃあお前もわからないってことか？

こいつ絶対許さない。別に何するってわけじゃないんだが。

「三鷹先生、嘘はいけないな。解らないなら合格にするんでしょう。」

「それがどうしたんですか斉藤先生。」

「いや、先ほど意味が解らないと、あなたはおっしゃったのに不合格では約束が違うのでは？」

さっきの斉藤先生か

俺の腕を直してくれたやつか。

だがこうも連続して普通じゃない奴が現れると気持ち悪いな。

そうだもつといえ。

盗み聞きですか？と露骨に嫌な顔をする。

「あなたは、自分のせいで怪我をさせて、責任を感じているようですが、試験に私情を挟まないでください。」

「私情を挟んでるのはあなたではないですか？
こんな試験私でも無理ですよ。」

そうだそうだー

「一体何があったんですか？」

「別に、ただの冗談です。
ため口がうざかったので、つい。」

つい、で不合格にされたのか俺は。
ため口直そうか一回よく考える必要もあるな。

「それでは、合格でいいですかな。」

「まあ、ここは斉藤先生の顔を立てます。」

マジか。あきらめかけたぜ。

「では、君ついてきなさい。
案内しよう。」

「君、行く前に質問に答えてくれる？」

俺は頷く。

「牢屋みたいなところに閉じ込められたって言うていたけど
本当かしら？」

「いや、まあその通りだが、実際はただの蔵だ。です。
テレビもあつたしな、です。」

「何をしたら8年も閉じ込められるの？」

「俺は何もしてない。」

「つい険しい顔になっているのがわかるが、
こればかりはしょうがない。」

「そう、別にあなたを最初から落そうとしたわけじゃないの。
本当よ？ 最初の質問で、私のバストサイズでも聞いていれば、
合格にしたわ。」

「だって、あなたをおとす理由がないもの。
だけど、俺は受かるのかとかなんかムカついちゃって。」

「わかるでしょと言いながら舌を出す三鷹先生。
いや別に巨乳には興味なんてないしな。」

別に小さい胸が好きって意味じゃないぞ。

勘違いすんなよ。

嘘を羅列してみるもんだな。何とかなつたぞ。

さてどうやら無事、合格できそうだ。

これで安心して、作戦を開始できる。

さて、俺たちを全否定するような能力者の巣窟。
こんなところぶっ壊してやるぜ。

才能ってなんだよ。まったく。

とりあえず、このさっき奪った薬草みたいなのを、
学食かなんかに入れてみよう。

保健室での密会

事業参観

「さて、あの子はいつから平気で嘘をつくようになったのだろうか。」

保健室のロッカーから声がする。

ロッカーを開けるとボサボサの髪の中年が中にはいつていた。私は戦闘には向いていない。

能力は超能力系、特殊型、相手の問いに相手が答えを持っていれば答えることが出来る。

ある程度、魔法薬の知識はあり、常人よりも強いという、自負はあるが、この場で不審者と戦い始める理由はない。

「親御さんですか？」

その可能性はないともいえない。

変人の親は変人だ。

「ええ、愚息が今度は何をやらすか心配だね。

あなたは超能力者か、初めて会ったよ。

では私もやってもらっていいかね？」

ええ、と答える。

どうやら危ない人ではないようだ。

出てくるところはあれだが、少なくとも敵意はないように思える。

どうせ、今までの会話も聞いていたんだろう。

いつもならそんな人をおもちゃにするような要求は聞かないが、あの子と言っていた、どうやら黒独君の親御さんらしい。興味がある。

緊張しますな。えーおほん、と黒独のお父さん（だろう。）は、話し出した。

「彼は私に罪を着せて現実から逃避する癖があつてね。」

「わたしの息子はいつたい何人、殺しましたかな？」

なんの冗談か。さすがにあの子が人を殺すわけがない。

サキという生徒をかばって傷を負ったといていたからだ。

私にため口で態度も最悪でくそむかっていたが、

根は優しい生徒なんだろう。

やはりこのおっさんただの変人か。

しかし私の口から出たのは驚くような答えだった。

「48」

その呪いの名は一騎無限戦争壁

ここは、この国唯一の国家特別大学つてのに認定されている。宇宙人との戦争で、最先端技術などは手に入らなかったが、人類は、特にこの国は兵器開発でかなり大きな利潤があった。

それゆえ、成金趣味とまで言わないでも、かなり金のかかった校舎を予想していた。俺は、どこかに旅行に行くとき下調べなどしない主義だ。よって、かなり普通な見た目に少なからずも落胆していた。

だから気付かなかった。

普段ならこんなミスはしない。

もしかしたら、少なからず合格したことを喜んでいたのかもしれない。

「尊君。」

いつもならここで逃げるべきだった。

俺のことを名前で呼ぶ奴は少ない。

みな、俺の家の名前で俺のことを覚えるし、

何より俺がこの名前を好きじゃない。

ちなみに誰も俺の名前を正しく読めてないんじゃないかと、少し不安になってきたのでいうが「みこと」が俺の名前だ。

容姿はこの学生とさほど変わらない。

俺は間違いなく初対面だった。

だが、こいつは！

「黒独くん、知り合いかね？」

俺は逃げる。

明らかに道に迷うが、捕まるよりましだ。

「知り合いなんて、、母ですわ。」

これは予想外だった。

俺の母は、もつと歳食ってたはずだ。
そう、少なくとも俺が家を出る前は。

これで何度目の離婚か再婚か。

今度の母さんは若いな！

俺はもてないってのに。

べつに悔しくなんてない。

そんなことを考えていたので一瞬逃げ遅れた。

「さあ、おうちに帰りましょう。」

そういつて鎌と人型に切り抜いた紙を取り出す俺の新しい母さん。
なるほど、数日でそこまで習得したのか。

俺ほどじゃないがなかなか才能があるな。

それとも分家の人間だろうか。

なら、このレベルを使っけてきても不思議じゃない。

準備期間が欲しい。

呪いってのは、正直、ここの能力者に比べれば攻撃力は果てしなく
薄い。

なので、気合さえあれば大体の呪いはやり過ごせる。

そして不幸になるという副作用がある限り、限りなく自滅に近い。

しかし、それでもこの状況はまずい。

こいつ一人でここにきている可能性は限りなく0に近い。

爺さんが来ていたら俺は死ぬ。

つまり足止めされたら終わりだ。

爺さんに見つかる前に対策を練る必要がある。

残念なことに、俺の持ち物はもうトンカチと予備の釘、亀の折り紙しかないのだ。

勝てる見込みは果てしなく0でしかない。

なぜなら、俺の爺さんは最強の域にいる。

死神とまで恐れられる。まあ呼んでいるのは俺だけだが。

「おくみょうしょうじんはいかいぜんくう……」

呪い言葉が始まった。

逃げるならここがチャンスだが

ならべくこいつが他の奴に連絡するのを遅らせたい。

そのためには、斉藤先生。

あんたに手伝ってもらおう。

「君のお母さんは何をやっているんだ。」

わかるよ、斉藤先生どんなにきれいな女性でも、

鎌をもって、変な踊りをいきなり踊り始めたら引く。

だがこいつが単純でよかった。

これは、鎌で人型に書いた紙の足を切り刻むことで、

そいつの足を動かなくする呪いと、7枚の人型に切った紙、4枚の馬の形に書いた紙、さらに短冊状に切った紙を、68枚をばらまき、これは無限を表し…。

まあ細かい説明はいい。

要は、これが俺の知っている呪いってことだ。足を動かなくする呪いと壁を作って、そっちに行きづらくする呪いだ。

だがしかし、弱点もある。

不幸になるのとは別に、紙をばらまいた場合はその範囲外に術者も死ぬほど行きたくなる。

こんなの初めて使うが、亀の折り紙を解き、自分の名前を、口を噛んで出した血で書く。もちろんただ名前を書くだけじゃない。特殊な文字だ、基本呪いってのはこの文字を使う、何の文字かは知らないが。

まあ歴史など何でもいいのだ。

ドン引きして言葉を失っている斉藤先生に、それをペタッと張る。これでおまえは形式上は俺だ。

がんばってくれ。

俺は逃げ出した。

「ふふ、邪魔をするんですか？ 庇うんですね？ それでは、」

俺はもう階段を上がろうとしていて、後ろを振り返ってなどいないので、

変な誤解をされたあげく、

鎌でめった刺しされようとしている先生など見てはいない。

あの人でよかった。

確か超再生するんだろ？

それにしても新しい母さんは容赦ないな。

病んでれてやつか？ 違うか。

「こら待て、黒独！ お母さんもやめてください。

痛い痛い痛い。なぜかあいつを追いたくない。なんでなんだー。」

俺が言ってもあれかもしれないが大変だな、 斉藤先生。

千代 緋色

私はそんなに弱いんだろうか。

一時間に及ぶ説教を受けて私の自信は赤点すれすれの地点まで、落ち込んでいた。

私は、数年前、一人で宇宙人達を撃退した。

それでマスコミには、ヒーローのように扱われ、

その記事を見ると私の能力はすごいことになっている。

確かに私の能力は、ダイヤモンドさえ切れる剣を作れるが、私には切れない。

剣は使い手を選ぶのだ。

それだけではない、初めの一回の時は地面から剣が生えてきて、私自身もすごく強くなったが、そんなことはもうおこらない。

でも、無制限に剣を無制限に作り出せるというのは、自分でもかなりすごいと思う。

その証拠に、この学校でも私はいちばんの成績をもらった。

それだけじゃない。

私はかなり強固な鎧を作り出せもする。

なんかテレビでは核爆弾でも破壊できないみたいに言っていたが、本当だろうか。

少なくとも私は試していない。

そもそも放射能とか絶対防げない。

だってこれ、結構脇とか隙間あるし。

試験の残り時間は1時間とちよつと。

地面に正座したままそんな高説を聞きつづけた私の頭はパンク寸前で。

生まれて初めて心からの土下座をしてしまった。

実際はあまり内容は入ってきていなかったが、正座がきつかった。

男なら軽々しく土下座なんてするもんじゃないが、私は女の子なので許してもらおう。

「まだ、話の途中ですが。」

「そこを何とか。」

「本当に反省していらっしゃっているのですか。」

「もうほんとに限界です。」

とても深い深いため息をついた後、

それではどこかゆったりと座れる場所を探しましょうか。

と言って、メイドは学校の校舎のほうへ歩いていく。

土下座しても説教され続けるのかと暗い気持ちになったが、まあ地面よりは楽だろう。

少しは説教の内容もちゃんと聞き取れるだろうし。

学校の校舎に入ろうした時、すいません。と声をかけられた。メイドさんが体を私とその人の間に入れて、臨戦態勢に入っただけ

わかった。

私は、この人の本職は軍人か何かだと思っている。
まだ試験は終わっていない。

帰った人ならたくさんいるだろうが、まだ試験をあきらめていない人もいるだろう。

そんな人に襲われる可能性は大いにあるのだ。

「何かご用でしょうか。」

この写真なんですけど、ここに写っている人見ませんでしたか。
そういつて、出してきた写真には私から学園章を奪い去った人だった。

そういえばこの人のせいで、こんなに怒られているのだ。

なのに、私だけ怒られるのはおかしい。

そう思うと怒りがわいてきた。

解っている。あんなところで私が転んだのがいけないんだ。

だからって全部持つていくことはないじゃないか。

2個ぐらい置いて言うてくれてもいいのに。

そうすれば私も怒られずに済んだんじゃないか？

まあ私も剣で切ろうとしたけどさ。

「私は存じ上げません。」

メイドさんがそう答えるとすぐに、そうですかと言って、
身を翻して林のほうに走って行ってしまった。

私、知っていたのにな。

なんとなく罪悪感があったが、私には関係ないことだ。

お説教が嫌だったので、ぐずっていたら三階まで来てしまった。ここまで2人ほど、人に出会ったが1人は私を見るとすぐに逃げしまったし、

もう一人は全身血だらけで、30代ぐらいの大人がいたが、私は大丈夫だ、試験に集中しなさい。と言われたし、明らかに私たちより年上で、

マントも羽織っていたので、教師なのだろう、と思い放っておいた。

なんとなくこの学校に入るのが不安になりだしていたが、ここまで来たのだ。やめるのはもったいない気がする。

結局、理科室みたいな大きな教室があったので、そこに座ることにした。

「さて、話の続きですが。

お嬢様がなぜあんなところでうずくまっていたのか、もう一度状況を確認しましょうか。」

「いや、なんか足がつっちゃって。」

またじとつとした目を向けてくる。

そんなことで、と言いたげである。

かなり憂鬱な気分だったが、じつくりと話てやろうと意気込んだ所で、

後ろのほうの机が動く音がした。

「どうかなさいましたか。」

気になって席を立とうとしたら咎められた。

直接そういったわけじゃないが、なんとなくそう感じる。

ここは座ってたほうがよさそうだ。

しかし、後ろを向いてみても何も無い。

きつと何かの拍子に机とかが音を上げたただけだろう。

それよりも私は、どうやって墓穴を掘らないように話をするのかに必死だった。

逃亡劇

少し前は、意外と普通だと思っていたこの校舎だったが、広い。とてつもなく広い。

先ず3階まで上がってきたが、まだ階段は続いているし、廊下も長く、一人でいると何か不安になるようだ。

人影もなく、廊下を走りたい衝動に駆り立てられるが、あまり廊下などの見晴らしのいいところにいるのは得策ではない。

そもそも、何人ぐらいで追ってきたのだろうか。完全に逃げ切ったと思ったのに、どこで俺の居場所をつかんだのか、

謎は多い。

そして、母さんが変わっていたことは衝撃だった。

俺は父さんの名前を知らない。

あいつは自分の子供にさえ自分の名前を教えなかった。

名前さえ解れば、いつも呪ってやろうと準備しているので、すぐに呪ってやれるのに。

俺はとりあえず、どこかの教室に入るのがいいと思い、理科室みたいなところに入った。

窓際にビーカーがあるので間違いないだろう。

廊下から足音が近づいてくる

誰かが、この教室に近づいてくるのだろう。

急いで、机の下に身を隠す。

誰であろうと見つかるのはまずいからだ。

俺の家の人間でなければ大丈夫だが、俺の家の人間かどうかは近づかないとわからない。

幸い、俺の家の人間には共通点がある、初対面の俺の母さんに気付いたのもこれのおかげだ。

親指に家紋が付いた指輪。これは、家の人間すべてがつける事を義務とされている。

理由としては、呪いで跳ね返ってくる不幸から、親を守るためらしい。

要は、ただのおまじないみたいなものだが、みんなつけている。俺はつけてないが。

机の下に隠れたところで目があつた。

暗闇 月

やはり男なら、人それぞれ女の子のタイプってのがあるだろう。俺は、まず黒髪が好きだ。そしてショートカットがいい。

おかっぱはさすがに少し嫌だが、髪の毛が伸びる人形みたいなのが好きだ。

そして無口で、色白なら最高だ。

髪は肩より長いくらいで、黒髪だ。

本で顔が半分隠れているが、目は大きく、くりつとしている。全体的に小動物のような雰囲気醸し出している。

とりあえず、口をふさぐ。

心臓が縮み上がったが、叫ばれたり声を出されたりするのはまずい。

手に唇や頬があたって柔らかいが、もう部屋に誰かが入ってきていると

思われるので、しょうがないのだ。

（しゃ、喋らないから手をどけて、く、苦しい。死んじゃう。）

手で口を押さえてるので、声など出るわけがないが、なぜか話しかけられた気がする。

（ちょっと、気のせいじゃないからとりあえず手を、手を。）

気のせいじゃないそうだと。
試しに、手をどけてやる。

（焦ったー、マジ焦ったー、死ぬかと思ったー、
もう学生証持つてないよ？ いじめないでよう。）

泣きそうな声だ。いや声は出してないのだろうが、そう聞こえる。

これはなんなのだろうか、幻聴にしてははっきりと聞こえすぎではないか。

（あ、それはね私の目を見たからだよ。

私は最後に私の目を見た人が、近くにいるときに、その人の心を見たり、
話しかけたりできるんだ。）

そんなことが本当にできるのだろうか。

それに心を読めるとはどの程度までできるのか、
それが本当なら、今も心を読まれていることだろう。
というか正直、五月蠅い。

（違う！ これは私の心がそのまま相手に伝わっちゃったって。
私いつもはこんなにおしゃべりじゃないよう。）

というか、なぜここにいるんだ。

（ああ、なんか廊下歩いてたら、学生証渡さないと氷漬けにされる
とか、

言われて怖くなっちゃて、その人に学生証渡して、危ないから、
試験終わるまで隠れてようとおもったの。）

へたれだな。

（いやいやいやいや、無理だって、私これしかできないし。）

確かにこの状況じゃこんなことができて也使えないな。

（…、あ、へえ、あなたのお母さんって年齢的にお姉さんて感じだよね。）

それ以上言ったらまじで殴る。

（ふふふ、私とあなたでは、あなたの心をそのまま見える私のほうが有利なのだ！。

恥ずかしい思い出とか、トラウマとか、えぐりつくせるんだからね。）

完全にドヤ顔だったがむなしくなったのかすぐに暗い顔になり、

（使えないとか言わないで傷つくから…。）

なんとなく慣れてきたので、これ二人とも傷つくだけだからやめないかと、

心の中で提案した。

（あなたが涙を流すか、私が他の人と目が合うかしないとこれ解けないから無理。）

確かにそれは無理だ。女の前でなくなど俺のプライドが許さない。こいつはそういうことも俺の心を見て知ったのだろう。

なんか、心の中が丸見えみたいで嫌だ。

（そうなんだよ、私これ出来るようになってから友達いなくなった。）

いきなりお前の過去を語られても困るんだが、それはそうだろう、誰にでも秘密はある。

（いや、でもね、実際そんなには丸見えじゃないんだって、本当にある程度なんだって。）

そうなのか、確かにその人の心がすべて見えたら頭が混乱だろう。

（信じてくれるの！ 初めてだよ、そんな風に思ってくれる人…友達になってください！）

心の声ってのは考えたことがそのまま伝わるのだろうか、かなり自分に素直なやつだ。

（お願いします。黒独くん二人目の友達になりたいです！暗闇 月っていいいます。）

こいつ俺に友達と言える奴が一人しかいないことを馬鹿にしてるんじゃないだろうか。

（そんなことないよ！）

なんかもうどうでもいい、考えたことすべてに突っ込まれるのは疲れる。

それに、俺のやろうとしてることも知ったうえで友達になってく

れというんならなってやってもいい。

（あ、全然気にしないよ、私も化け物言われてきたし。）

何故だ、才能が開花した奴らはテレビなどでも英雄扱いで、そんなことを言うやつはいないはずだ。

（表だっては言われなかったけど、目があったりするともうぼろくそ言われたよ。）

それはお前が何かしたんじゃないんだろうか。

（いや、まあその人の秘密とか、分かるから強請ったりもしたけど。）

最低か！

（だから少しは解るし、いいと思うよ。協力しろって言われたら、微妙だけど。）

基本、才能が開花した奴全般は嫌いで友達にはなりたくないが、まあ一人くらいいてもいいか。

（やったー、友達できたー。私黒髪で色白で無口でよかったー。君の好みにドストライクでよかったー。）

とりあえず殴っておいた。

そしてお前は絶対に無口じゃない。

（いや、私、最後に喋ったの、いつか思い出せないくらい無口だよ？

私、休み時間とかずっと本読んでるタイプだし。）

確かにかなり厚い本を読んでいる。
というかそれなら俺も読んだ。確か…

（ネタバレはやめて！！！！）

相当焦ったのか、頭を机にぶつけた。
かなり痛そうだ。

（だ、誰のせいだと思ってるんだよう。）

「誰だ！！」

やばい見つかった。

そしてやばい、あいつは千代緋色だ。

なんでこんなところに。

変！身！

（ねえ、この人って怖い人なの？

心読めるとか読めないとかじゃなく、あなたの体震えてるけど。）

あまり意識してないつもりだったんだが、
トラウマになっていたらしい。

月、たぶん俺、切り刻まれると思う。

（切り刻まれるってどういうこと！？）

「おお、いい所に。さっきの奴じゃないか。

こいつに説明してやってくれないか。私は悪くないって。」

（なんか全然フレンドリーじゃん。）

確かに、気にしていませんよという感じだ。
これが力を持つてる奴の余裕ってやつなのか。

「お嬢様、この人たちがおっしゃっていた人たちでしょうか。」

メイドだ。

俺に正しい知識があるのかはわからないが、
長いスカート履いて手前にエプロンがあつて、頭に白い布みたいな
がある。

つまりメイドだ。

（メイドだね。）

こいつの賛同も得られたので間違いないだろう。

歩きづらくないのか、そして制服じゃなくていいのか。

俺も、焦げてたり切れてたりとあまり人のことを言えた服装ではないが。

「さて、私はどうでもいいのですが、お嬢様が納得なさらないでしょうから、

学生証はすべて奪わせていただきます。」

なんか、どこかのアニメの変身前のようなポーズをとる。

これはあれか、なんちゃら仮面になる気なのか。

「へん、

私は、もう気にしてないよ。」

「そうですか。お嬢様がそうおっしゃられるなら。」

少し残念な気もしないでもないが、千代さんの一言で、助かったらしい。

（助かったはずなのに、なんでこんなに残念な気持ちでいっぱいなんだろう。）

「それでは、お茶を入れさせていただきます。」

なあ、つつきー。

（なに？ テンパってるのは伝わってくるけど、いきなりフレンドリーだね。）

これどうすればいいんだと思う？

（分かんない、なんかお茶飲み始めちゃったね。）

「どうしたのですか、お座りください。お茶を用意させていただきます。」

こうして地獄のお茶会が始まった。

一生ゲーム

「アール 그레이です。」

「うむ、ありがとう。」

「ああ、すいません。」

「…ありがとう。」

紅茶なんてよく分からないし、初めて飲むが、おいしい。

（現実逃避しないで、私こんなおいしくない紅茶初めてだよ。
気まずすぎるってか、あなたが緊張しすぎて、私まで緊張してるんだよ。）

確かに、本当は味なんて解らない。
アール 그레이ってなんだ、確かイギリスの伯爵位ではなかったか。
チャールズ 그레이伯爵が何故、こんな所で出てくるんだ。

（マイナーすぎるよ、なんで紅茶は知らなくてそっち知ってるんだよう。）

「うむ、お説教も終わったし、なんかゲームでもしよう。
メイドよ。なんか持っていないか？」

「ち、あんまり調子に乗るなよ。」

「な、何か言ったか。」

声が震えてるぞ。

「いいえ、トランプと一生ゲームがあります。」

いやどこに一生ゲームあるんだよ。

「ここに、」

そういつて、背中からゲームの箱を取り出す。
本当にどこから出したのかが謎だ。

そして俺何も言っていないよな？

（言っていないと思うよ。たぶん。）

「うむ、私は一生ゲームがいい。」

みんなは？ といった目を向けられる

「ああ、うん。」

「……いい。」

こうしてゲームが始まった。

要は双六で、ゴールした時一番金もってたやつが勝つゲームだ。
ルーレットを回して、

千代さんは野球選手。

メイドは漫画家。

俺は芸人。

月はトレジャーハンターに決まった。

ゲーム序盤は所詮運ゲーなので、そんな差はつかないと思ったのだが、

チュパカブラに襲われ、キャトられて100ターン休みになった。

なんだこのゲーム。

まだ、3ターンめなのに。

暇だなー、と思っていたが、8ターン目に仙台さんが、津波に流されて、無人島に流れ着き50ターン休みとなった。

「なんなんだろうなこのゲーム。」

そんなことで仙台さんから、話しかけられた。

ここはしっかり返さないと、

微塵切りにされる可能性がある。

「あ、お、おう。」

（それうまく返せてないよ。）

五月蠅いな、お前もは喋ってすらないじゃないか。

おまえは、双六の中で、トレジャーハンティングしとけよ。

（喋ったよ、「…ありがと。」と「…いい。」っていったじゃん。私めっさがんばってるじゃん。）

「どうしたんだ？」

月が変な事を言うのに気を取られていた。

「いや、別に。」

「そうか、なにかこう、質問とかないのか？
私はあるんだが。」

そういつてバックをまさぐりだす。
そして出てきたのは、あの時使った藁人形だった。
まあずたぼろだったが。

「この人形お前のだろう。これの血がついてないのがあつたりしないか？
ならべくなら、釘で刺さったりしていないのがいいんだが。」

なるほど、あの時は腕から血が出ていたし、べつとりと血がついている。

そもそも、藁人形なんてなんに使うのだろうか。

確かにちゃんと作っているので、
相手の名前も特殊な文字を使って書かなくてはならないので、
単体でもらっても意味がない。

しかし、これが欲しいというなら作ってあげてもいい。

「誰か呪いたいほど憎い奴がいるなら、普通に殴ったほうが早いぞ。」

「？、はは、確かに呪いと言ったら藁人形だな。
だが、そんな使い方をするわけじゃなくだな、その、
可愛いから、一体欲しい。」

同志か！！！！！

ルーレットを回していた、月がびくうっとした。
(ど、どうかしたの。)

緋色のことが少し好きになった。

「よし！　いくらでも作ってやる！
今持ち合わせがないのが残念だが、絶対作ってやる！」

「なに、自分で作っているのか、これは商品で売っていても、
不思議ではない完成度ではないか。」

ガシツと握手をする俺たち。

「な、何をなさっているのですか？」

少し焦った様な感じでメイドがこちらに近づいてくる。
一生ゲームはメイドさんが一位上がりしたらしい。

人探し

特に何事もなく6時間終了の鐘になる。

こうして、入学試験は終わった。

泣きついてきたので、

月には俺の学園章を二枚わけてやった。

まあ傍から見たら、いきなりお願いとつぶやいて土下座したように見えるので、

緋色は戸惑っていたが、俺には、親からも気持ち悪がれてるし、おかあさんが浮気してるのも知ってるの私だけだし、絶対に帰りたくないんだ！。という声が聞こえていた。

ほんのちよつとだけかわいそうになった。

それだけだ。俺のタイプとか、そういうのは関係ない。

とりあえず、俺たち四人は合格した。

あとで聞いた話だが、最初の竜にすでに大半の生徒が、再起不能、逃走をしていたらしい。

今年の合格者は、348人。
かなり少ないらしい。

あと、あいつなら大丈夫だろうが、俺の親友も合格していると信じたい。

俺も相当こいつらを恨んで、殺してやりたいとさえ思っているが、

あいつの無念は、俺の恨みの数倍だ。

しかしケータイに出無いので、少し心配になった。

それに受付がこれから30分の間だそうだ。

道に迷っているということもあるし、俺は、2枚提出して、

合格した。そして4枚まだ手元にあるのでもしもの事があれば助けてやろうと、

思ったのだ。

戦闘を制限するために教師たちが、校庭に出て行った。

それについて、俺は親友を探しに出た。

親友の名前は、鬼神 柳

俺は、鬼と呼んでいる。これはあいつからこう呼んでくれと言われた。

俺は、俺を、尊と呼ばないことで了承した。

さて、どこを探すかは簡単だ。

奴は、自分に徹底的に厳しい。

もっとも険しそうなところに行けばいい。

「私も、行く。」

月だ。こいつに俺と喋るときは口で話せ、と言ったらすぐ静かになった。

「私も友達を探す。」

袖をくいくいつと引つ張ってくる。

どうせ俺の考えてることは問答無用に伝わってしまうのだろう。

心を読むのをやめろと言ったが、代わりに誰かの気持ちを読み続けないと、

いけない私の気持ちになって、と言われてしまった。
なら別に、答える必要はない。心を読まれてしまっているのだから。

勝手についてくればいい。

それに人探しは多いほうが早く見つかるはずだ。

「どこか過酷な場所知らないか？」

「…過酷な場所。」

そういつて、月は燃え盛る体育館を指さした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682y/>

最弱の英雄伝

2011年12月15日21時52分発行